

An Analysis of A “RIYŪ” Adverbial Clause TIO Sunbun

“理由”を表す副詞節の一考察

趙 順 文*

〔中文摘要〕

本文定義“原因”為前句事件與後句事件內不含說話者的主觀意見，整體視為一因果關係的表現；定義“理由”為前件事件或後句事件內含說話者的主觀意見，整體視為邏輯學的含意關係的表現。

在此定義下分析實例，證明不僅副詞子句「ので」可表“理由”，其衍生的「の（だろう）か」也一定用於表示“理由”的副詞子句。與此相似的「せい（だろう）か」可視為副詞子句「せいで」的衍生，也一定用於表示“理由”的副詞子句。

【關鍵詞】

原因（原因）・理由（理由）・副詞子句（副詞節）・「node/no (darō) ka/seika」（「ので／の（だろう）か／せいか」）

1. 序

原因・理由を表す「から」「ので」節については永野（1951・1988）・趙（1988・1989・1990）・上林（1994）によって多くの研究がなされている。その他の副詞節に関しては大綱的であるが、森田ほか（1989）と益岡ほか（1992）が取り上げられよう。小稿ではこれ

* 作者為本校東方語文學系教授

らの研究を踏まえながら、なお「迷子になって、泣いたのか、その子の目は赤かった」(15万・6)「新学期が始まって、皆が張り切っているせいか、クラスの雰囲気明るく感じられる」(15万・9)のように「のか」「せいか」などを通して従来学者が一緒くたにしていた原因・理由を表す副詞節を“原因”と“理由”に分けることを主張するところに目的がある。

2. 問題点

森田ほか(1989)は原因・理由を表す副詞節について次のように列挙している。

からには／からは／以上(は)／うへは／かぎり(は)／だけに／だけあって／ばかりに／もので／ものだから／ものを／ため(に)／おかげで／せいか／に従い／に従って／につれ(て)

一方、益岡ほか(1992)は原因・理由を表す副詞節はa) 事態間の因果関係を表現するものと、b) 判断・態度の理由や根拠を表すものがあるととして、次のように列挙している。

- a) ので／ため(に)／結果／だけに／あまり／せいで／ばかりに／述語テ形
- b) から／のだから／もので／ものだから

森田が原因・理由を無差別に取扱っているのに対し、益岡はもう一步進んで原因・理由を二分して敷衍しているが、これは非常に示唆的である。小稿ではこの線に沿って、“原因”は前件の事態と後件の事態を表現主体の気持ちを加えないままの因果関係として捉えるのに対し、“理由”は前件の事態あるいは後件の事態を表現主体の気持ちを加えた推理関係として捉えると定義したい。つまり、“原因”は因果関係に用いられるのに対し、“理由”はもっぱら推理関係に使われる点が異なるのである。因果関係か推理関係かのいずれかは前件後件を問わず、表現主体の事態に対する心的態度の有無によって左右される。次の用例を参照されたい。

“理由”を表す副詞節の一考察

- (1) 彼は妻に対する愛情が深かったので、妻の死後、再婚しなかった。(15万・2)
- (2) 問題は前ページから続いているので、注意しなさい。(国・511)
- (3) 彼も過ちを反省しているようなので、もう許してやろう。(漢・108)

用例(1)～(3)はいずれも「ので」で結び付けられた複文だが、用例(1)では前件の事態と後件の事態を表現主体の気持ちを加えないままの因果関係を表すのに対し、用例(2)では後件の事態を、用例(3)では前件の事態と後件の事態を表現主体の気持ちを加えた推理関係を表すことに注意されたい。つまり、用例(1)は“原因”を表すが、用例(2)は“理由”を表すものと考えられる。大切なのは“理由”を表す事態がもっぱら前件のことを指すけれども、表現主体の気持ちが前件の事態か後件の事態かのいずれかに介入することができる点である。上述のように益岡ほか(1992)では「ので」は単なる“原因”の分類に属するとしているが、この点には疑問を持っている。理由は単純で、“理由”に属する用例が実に多く使われるからである。つまり、この場合の「ので」は単なる“原因”の分類ですむよりも、むしろ“原因”と“理由”との両分類にまたがると解釈されるのがよい。以下では、上述の定義に沿って、もっぱら従来看過されてきたいくつかの“理由”を表す副詞節を考察してみよう。

3. “理由”を表す副詞節

上述の定義に従えば、従来のいわゆる原因・理由を表す副詞節の分類の妥当性に疑問を挟む余地は大いにあると思う。なぜかというと、多くの副詞節は実際の言語データを収集・分析した結果、“原因”か“理由”かのいずれかに属する二者択一の分類で掬い切れなくて、“原因”と“理由”との境界線がはっきりしておらず、中間段階に位置付けられることが分かったからである。つまりプロトタイプ論的に“原因”と“理由”との境界線があいまいで、素性自体のあり方が連続的なのである。「ので」のように“原因”の意味用法を強調するあまり、却って実例を無視して、“理由”の意味用法をおろそかにしてしまう学界の現状を打破するために、実証研究はいくら強調しても強調し過ぎることはない。

3.1 「ので」

副詞節「ので」に関しては今なお“原因”説に傾いているようだ。例えば小泉（1993）は命令文は「から」と結びつくが、依頼文には「ので」が用いられるとして、次の例文を上げている。

（4）？やかましいので、向こうへ行きなさい。

一方、阪田ほか（1995）は「から」も似ているが、「から」が後に命令・希望・意志など話す人の気持ちを表す文がくるのに対して、「ので」は事実をそのまま表す文がくることが多いとしている。

しかし、次の用例で明らかのように、これは言語データにそぐわないのである。

（5）道に水道工事の穴が開けたままになっているので、暗くなったら、注意しなさい。（小・9）

（6）その山は深いので、道を誤ると、大変だから、地図と磁石を持ちなさい。（小・26）

（7）このままではわかりにくいので、資料の分野別にまとめて、整理してみなさい。（国・719）

（8）下が水だったりすることもあるので、お風呂の湯はよく混ぜてから、入りなさい。（国・752）

（9）塩は湿気を呼びやすいので、容器のふたをしっかりと閉めておきなさい。（国・210）

（10）かみなりは辺りの一番高い所に落ちるので、平らな原っぱなどでは注意しなさい。（小・91）

（11）A は足の故障が治り切っていないので、今度の試合に一応 A 君を除いて、メンバーを考えなさい。（小・489）

“理由”を表す副詞節の一考察

- (12) 夏場はものが傷みやすいので、なま物は必ず火を通すようにしなさい。(小・522)
- (13) 昨日の話は少し長いので、足を開いて、楽な姿勢で聞くようにしなさい。(小・541)
- (14) ジャングルへ入るときは、獣に襲われる危険性があるので、銃を携えてゆきなさい。
- (15) 昼と夜の温度差が大きいときには、風邪を引きやすいので、注意しなさい。(国・249)
- (16) 発作の前に兆候があるので、そうしたら、この薬を飲ませなさい。(国・490)
- (17) 白い毛糸は手垢で黒ずみやすいので、編む前に、よく手を洗いなさい。(国・526)
- (18) おじさんと大事な話があるので、お前は暫く座をはずしなさい。(漢・383)
- (19) 山の気候は変わりやすいので、半袖だけでなく長袖でも持っていきなさい。(漢・829)

これらの副詞節「ので」は二節あるいは三節複文を問わず、いずれも後件の事態に命令表現「なさい」という表現主体の強い気持ちが介入していることを意味するから、間違いなく“理由”節を表すことになる。もっとも副詞的「から」ほど“理由”説の「ので」の用例が多くはないのも事実だが、「ので」にも“理由”説の用法があることを全面的に否定できなからう(注1)。

3.2 「のか」

副詞節「のか」が従来看過されてきた“理由”説の一つであることは後述の用例で分かる(注2)。「のか」は多くの副詞節と違って、もっぱらすでに成立した後件の事態を推

注1：実際、命令だけでなく、依頼・希望・勧告・意志・疑問などの用例は趙(1988・1989・1990)で詳しく取り上げられている。

注2：私の知る限り、「のか」は副詞節として一度も言及されたことはない。

理に、逆戻りして自問を示す前件の事態の不確実な“理由”を述べるのに用いられる。これは一見して多くの副詞節と同様、前件の事態が“理由”で、後件の事態が成立することを述べるけれども、事実上、後件の事態が成立してはじめて、前件の事態の“理由”を推理することができることに注意されたい。引用は長いが、参考のために手持ちの用例を列挙してみよう。

- (20) 彼はその話によほど共鳴したのか、しきりに相づちを打っていた。(15万・3)
- (21) 踏み切り板をわずかに踏み越したのか、審判員の赤旗が上がった。(15万・8)
- (22) 商いがうまくいっているのか、彼は近頃きげんがいい。
- (23) 庭で妹たちがままごとをしていたが、そのうちに飽きたのか、どこかへ行ってしまった。(15万・10)
- (24) 生徒のあくびがうつったのか、先生も小さなあくびをしました。(15万・12)
- (25) 弟はまたけんかでもしたのか、顔に青黒いあざをつけて、帰ってきた。(15万・14)
- (26) 油が切れたのか、ミシンがギシギシいうので、そうじをして、油をさした。(15万・29)
- (27) 仕事を完成して、安心したのか、容態が急変し、彼女は帰らぬ旅についた。(15万・42)
- (28) わたしたちの祈りが通じたのか、母の病気は徐々に快方にむかっていった。(15万・75)
- (29) 男は自分の居場所はないと悟ったのか、黙ってその屋敷を出ていった。(15万・75)
- (30) 庭にねころがっていた画家はインスピレーションがわいたのか、ムクッと起き上がって、アトリエへ入っていった。(15万・85)
- (31) 動物園の白くまは見物人におどろいているのか、金網の前で落ち着きなく動いていた。(15万・91)

“理由”を表す副詞節の一考察

- (32) アンテナの調子が悪いのか、うちのテレビの映像がゆがみます。(15万・112)
- (33) おじいさんに会えるのが嬉しいのか、少女は躍るように、はずんで歩いてきました。(15万・145)
- (34) 日頃の無理がたたったのか、父の健康は目に見えて、衰えた。(15万・145)
- (35) 祈りが聞き入れられたのか、少女の願いはかなったのです。(15万・203)
- (36) 子供だと、ばかにしたのか、店の人の態度ががらりと変わり、横柄になった。(15万・217)
- (37) 若いころは豊かな感覚を持った画家だったが、年を取って、その感覚も鈍ったのか、最近は平凡な絵をかく。(15万・218)

用例(20)～(37)はいずれも『15万例文・成句現代国語用例辞典』から採集したものが、用例(22)(32)(37)を除いて、夕形の形で表現される。これは確定した後件の事態に基づいて、前件の事態の“理由”を推理することを一層たやすくせしめるにはほかならない。用例(22)(32)(37)は一見して矛盾しているようだが、常に確定している状態あるいは動作を表すことで、夕形と一致していると考えられる。実際、これらの副詞節「のか」が一律に「ので」に置き換えられると、意味的に“理由”を“原因”にすりかえる点を除いて、両者の間にはさほど差異はなかろう。また次の用例を参照されたい。

- (38) 薬が効いてきたのか、痛みがようやくうすらいできた。(国・60)
- (39) 病室の大きなベッドはスプリングが古いのか、寝返りをうつたびに、きしんだ。(国・108)
- (40) 今場所は不調なのか、あの力士は得意の技を決められない。(国・229)
- (41) 彼は冒険好きの血がたぎるのか、アフリカの奥地へ出かけるという。(国・444)
- (42) コンビを組んでから、日が浅いのか、二人の行動はちぐはぐです。(国・482)
- (43) 疲れがたまっていたのか、今日はあまり調子が出なかった。(国・490)
- (44) よほどショックだったのか、彼女はもう試合に出るのがつくづくいやになったともらしている。(国・506)

- (45) 先週の大会の疲れが残っているのか、どうも今日の彼はいつもより体が重そうだ。(国・502)
- (46) 食べ過ぎたのか、腹が張って、苦しい。(国・658)
- (47) アルバムを見終わった祖父ははるかな昔を思っているのか、じっと目をとじたままだった。(国・659)
- (48) 学校の教育方針を反映しているのか、ここの生徒は総じておとなしいようだ。(国・660)
- (49) デビュー以来好調だった彼もプロの壁にぶつかったのか、最近成績が下がってきた。(国・707)
- (50) コートのすそが触れたのか、テーブルがかすかにゆれた。(国・716)
- (51) 子犬はよほどのどが渴いているのか、無我無中で水を飲んでいる。(国・801)
- (52) 靴底が破れているのか、水が漏って、中まですっかりぬれて、とても冷たかった。(国・837)

用例(38)～(52)はいずれも『国語基本用例辞典』から持集したものだが、前出の用例(20)～(37)と同様、夕形を占めるのがほとんど。そうでない用例は確定している状態あるいは動作を後件の事態に含む点で例外視された前出の用例(20)(32)(37)と一致している。注意すべきは用例(45)では「重そうだ」、用例(48)では「おとなしいようだ」というように両方とも後件の事態に表現主体の気持ちが介入しているものの、確定した後件の事態を幾分柔げた形を基に、前件の事態の“理由”を推理すること自体、何の変わりはないと思う。もちろん、今まで述べてきた副詞節「のか」は「ので」と違って、後件の事態に命令・希望・依頼・勧告・意志など表現主体の心的態度介入の用例を一切含まないことに注目されたい。

疑問語が付いていない副詞節「のか」は「ので」に置き換えられても、自然な文となるのに対し、疑問語が付いている副詞節「のか」は「ので」に置き換えられると、ただちに変な文になってしまうことは次の用例で分かる。

“理由”を表す副詞節の一考察

(53) 何を思ったのか、男はその場できびすを返し、今来た道をもどりはじめた。

(国・136)

(54) せっかく作りあげたガラス細工を、何を血迷ったのか、職人は床にたたきつけてしまった。(国・485)

(55) だれがしゃべったのか、昨日のけんかのことは既に先生の耳に入っていた。

(国・632)

(56) どこで転んだのか、学校から帰った弟のズボンのひざが抜けていた。(国・671)

(57) どこで踏んだのか、靴の底にガムがくっついている。(国・711)

用例(53)と(54)は「何を」、用例(54)は「だれが」、用例(55)と(57)は「どこで」というようにいずれも疑問語を取っているので、当然のことながら“原因”ではなく、“理由”を表すに決まっている。

一方、こうした副詞節「のか」から派生した「か」「のだろう(か)」「だろうか」「ものか」なども考えられる。次の用例を参照されたい。

(58) 新聞記者は臨時ニュースを聞くが早いのか、もう外へ飛び出していった。(国・655)

(59) さしもの悪徳商人も悪運が尽きたか、ついに摘発を受けるところとなった。(15万・10)

(60) 何を思ったか、旅人は目的地を目前にしながら、やおらきびすを返した。(15万・253)

(61) 父は中年太りを気にしてか、トレーニングジムに足しげく通っている。(15万・17)

(62) よそ者のわたしたちをいぶかってか、村人たちが遠巻きに集まってきた。(15万・76)

(63) 彼女はたぐいまれな美しさがわざわいしてか、ほかの女性にねたまれることも多い。(国・444)

- (64) 両親の優れた血筋を引いてか、その子は数字に関してはすばらしい才能をもっていた。(国・669)
- (65) 老人は話しつかれたものか、しばらくじっと目をつむっていた。(国・806)
- (66) 私も人生のたそがれにさしかかったのだろうか、近頃、身も心も老いを感じるようになった。(国・450)
- (67) 熱があるのだろうか、冷や汗が出て、悪感がする。(15万・131)
- (68) 何かいい知らせでもあったのだろうか、姉は飛び上がって、喜んでいる。(15万・517)
- (69) よほど大きなショックを受けたのだろうか、女はいつまでも貝のように押し黙っていた。(15万・138)
- (70) どうしたのだろうか、畑の道を小さな男の子が見え隠れについてくる。(15万・181)
- (71) ライトの加減だろうか、全体の色がやけに白っぽく見える。(国・149)

用例(58)～(60)では「か」は「のか」によって置き換えられても、意味的に大差はない。用例(61)～(64)ではいずれもテ形に「か」を後続させた副詞節だが、固い文体に用いられると考えられる。副詞節「ものか」に関する用例は一例しか見当たらない。これはほぼ「のか」に相当するだろう。用例(66)～(68)では「のだろうか」、用例(69)と(70)では「のだろう」、用例(71)では「だろうか」というようにいずれも「のか」と「だろう」が組み合わさったものと考えられる。自問の意味をも表す「だろう」は「か」を後続させなくても、独立して使われるので、「のだろうか」から派生した「のだろう」が無理なく使用されるのも至極当然であろう(注3)。

一方、副詞節「のか」に似ている名詞節「のか」ないし「か」も存在しており、主節述語の格成分として働いていることは次の用例で頷ける。

注3：益岡ほか(1992:137)は「だろう+か」は相手の推測・予測を尋ねることはできず、基本的には自問型の疑問文になるとしている。

“理由”を表す副詞節の一考察

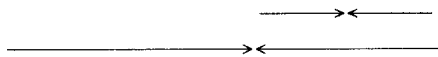
- (72) 二本の映画のどちらを見に行くか、弟にとっては難しい問題のようだ。(国・789)
- (73) あまり突然な出来事にどうしていいか、わからなかった。(国・565)
- (74) 当時の庶民の生活がどんなであったか、この絵に見ることができる。(15万・110)
- (75) お城にはどう行ったらいいのか、土地の人に聞いてみました。(国・564)
- (76) 今日は傘が要るのか、要らないのか、はっきりとおしえてくれる天気予報がほしい。(15万・80)
- (77) 彼女のこの言葉をどのように受け止めたらいいのか、とまどっている。(15万・90)
- (78) 馬は本当に立ったまま、ねむるのか、これは父の話を聞いて、生まれた疑問です。(15万・103)
- (79) どうすれば、そんなにスマートになれるのか、その秘訣を教えてよ。(国・670)
- (80) 今後、どのように会を運営していくか、まずその方針を決めよう。(国・729)
- (81) 入部するのかどうか、早く答えてほしいと、顧問の先生から返答を促された。(15万・101)
- (82) 本で読んだことが正しいかどうか、先生と一緒に実験を行うことにした。(15万・134)
- (83) 連絡がないので、無事に着いたのかどうか、気がもめます。(15万・232)
- (84) 長い付き合いなので、彼が何を悩んでいるのか、あらかじめ察しが付いた。(15万・34)
- (85) 2人が離婚するのではないかと、まわりの人は気をもんでいる。(日・216)

名詞節「のか」ないし「か」に関しては用例(72)と(73)では「が格」、用例(74)～(76)では「を格」、用例(77)では「に格」、用例(78)～(80)では「同位格」というようにいずれも主節述語の格成分として役割を果たしている。注意すべきは用例(81)

～(83)ではいずれも「(の)かどうか」を取るという点である。こうした疑問語なしの真偽疑問文は紛れもなく主節内に組み込まれ、主節動詞の格成分として機能している。なお用例(82)では「本を読んだことが正しいかどうか」は「実験」、用例(84)では「彼が何を悩んでいるのか」は「察し」を修飾する役割を果たしていると考えられる。もっとも用例(83)では「無事に着いたのかどうか(と)」、用例(85)では「2人が離婚するのではないかと」というようにいずれも主節述語「気をもめる」「気をもむ」にかかる「で格」から派生した副詞節と考えてよかろう。

上述したところをまとめると、“理由”説を表す副詞節「のか」と主節述動詞の格成分を表す名詞節「のか」とは形が似ているけれども、「のか」が「ので」によって置き換えられるかどうかに関して、疑問語なしの副詞節は可能であるのに対し、疑問語なしの名詞節は不可能だという統語上の役割が随分違うことが分かる。両者の違いは次の例文による修飾関係を図示すれば、一層はっきりしてくる(注4)。

(a)風邪を引いたのか、学校を休んだ。



(b)彼がいつ来たのか、私には分からない。



つまり、副詞節「のか」は主節述語に直接にかかるのではなく、主節自体にかかるのに対し、名詞節「のか」は主節述語に直接かかって、述語の一成分として機能を果たしているのである。かくて、副詞節「のか」自体は後件の事態を基に、前件の事態の“理由”を表すに至っている。

3.3 「せいか」

副詞節「せいで」は形式名詞接尾語「せいだ」から派生した副詞で、もっぱら望ましく

注4：日本語の文中にある成分同士の修飾関係は(並立)前後修飾の一語に尽きる。詳しくは趙(1995)を参照されたい。

“理由”を表す副詞節の一考察

ない前件の事態と後件の事態を表現主体の気持ちを加えないままの因果関係の“原因”を表すのに用いられる。次の用例を参照されたい。

(86) 小さい活字の本を読みつづけたせいで、目がちかちかして痛い。(15万・58)

(87) ああ、今日は雨降りが多いせいで、稼ぎが少なかった。(15万・191)

一方、副詞節「せいか」は「せい」が自問の「か」を後続させたもので、「のか」と同様、確定した後件の事態を基に、望ましくない前件の事態の“理由”を推理するのに使われる(注5)。次の用例を参照されたい。

(88) 昨夜は眠りが浅かったせいか、今朝は頭が重くてたまらない。(15万・15)

(89) 隣のおじさんは若い時から苦労したせいか、なかなか味のある人です。(15万・16)

(90) 歩くのは苦手だったが、少し訓練したせいか、だいぶ足が強くなってきたようだ。(15万・16)

(91) 年を取ったせいか、毎日が安泰に過ごせれば、それだけで十分という気になってきたよ。(15万・42)

(92) 寝不足のせいか、神経がいらだって、仕事に集中できない。(15万・79)

(93) ヒルの陰のせいか、テレビの映りがよくない。(15万・99)

(94) 体の具合が悪いせいか、動くのがどうもおっくうだ。(15万・142)

(95) 人前では緊張するせいか、音程がふらついて、どうもうまく歌えない。(15万・157)

(96) 祖父は年を取ったせいか、古い昔を懐古することが多くなった。(15万・161)

(97) 根が正直なせいか、隠していても、すぐ顔色に出てしまう。(15万・171)

(98) テレビカメラを意識したせいか、みんな表情が固かった。(15万・193)

注5：森田ほか(1989：110)は「せいか」に言及しているのに対し、益岡ほか(1992：191)は「せいで」を説明しているものの、両方とも「せいか」と「せいで」との違いに触れていない。

(99) 貧しい家庭に育ったせいか、わたしはいつのまにか我慢強い性格になったよう
です。(15万・208)

用例(88)～(99)ではいずれも確定したと見られる後件の事態を基に、望ましくない前件の事態の“理由”を推理している。ここで“確定したと見られる”とはすでに確定した事態ないし確定できそうな事態をさす表現のことである。つまり、用例(90)と(99)で明らかのように「せいか」は前述の「のか」と同様、後件の事態を表すのに「～ようだ」を取ることができるのである。言い換えれば、後件の事態には命令・希望・依頼・勧告・意志など表現主体の心的態度が絶対に介入できない。なぜならば、これらの表現主体の心的態度は後件の事態がまだ成立していないことを意味するので、当然のことながらこうした後件の事態に基づいて、前件の事態の“理由”を推理するどころではないからだ。

実際副詞節「ためか」は「ため(に)」から派生したものと考えられ、同じ統語構造を取っていると思う。次の用例を参照されたい(注6)。

(100) イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ギリシア語、チェコ語、ポーランド語など、その他の多くの言語でも、主語は動詞の活用語尾でわかるためか、省略が可能だ。(日本・142)

4. 結語

上述したところをまとめて、次の三点を小稿の結語としたい。

- ① “原因”は前件の事態と後件の事態を表現主体の気持ちを加えないままの因果関係として捉えるのに対し、“理由”は前件の事態あるいは後件の事態を表現主体の気持ちを加えた推理関係として捉えると定義する。

注6：採集した「ためか」の用例は1例しかないので、目下の所、これに深く立ち入りはしないことにした。

“理由”を表す副詞節の一考察

②副詞節「ので」が“原因”を表しうるのみでなく、“理由”を表す場合も多いことは実例で分かる。

③「の(だろう)か」「せいか」はいずれも「ので」「せいで」から派生したものと考えられ、確定したと見られる後件の事態を基に、前件の事態の“理由”を表すのに用いられる。

参考文献 (abc 順に)

- IWASAKI T. (岩崎卓) 1995 「ノデとカラ——原因・理由を表す接続助詞——」
宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』
くろしお出版
- KANBAYASHI Y. (上林洋二) 1994 「条件表現各論——カラ/ ノデ——」『日本語学 8月号』 明治書院
- KOIZUMI T. (小泉保) 1993 『日本語教師のための言語学入門』 大修館
- MASUOKA T. & TAKUBO Y. (益岡隆志・田窪行則) 1992 『基礎日本語文法——改訂版』 くろしお出版
- MORITA Y. & MATSUKI M. (森田良行・松木正恵) 1989 『日本語表現の文型』
アルク社
- NAGANO M. (永野賢) 1952 「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学 2月号』
- ————— 1988 「再説『から』と『ので』とはどう違うか——趙順文氏への批判を踏まえて——」『日本語学 12月号』 明治書院
- SAKATA Y. & ENDŌ O. (阪田雪子・遠藤織枝) 1995 『日本語を学ぶ人の辞典』
新潮社
- TIO S. (趙順文) 1988 「『から』と『ので』——永野説を改訂する——」『日本語学 7月号』 明治書院
- ————— 1989 『「ので」の研究』 建強出版社

- ————— 1990 「『から』と『ので』——永野説を改積する（続）——」『東呉外語学報 5』 東呉大学
- ————— 1995 「『台湾化』の日本語説解文法」『日中文化18』 中国文化大学
- ————— 1996 「新聞日本語の構造シラバス」『台湾日本語教育論文集 3』 中華民國日語教育学会

用例出典

- 『国語基本用例辞典』略語『国』
- 『15万例文・成句 現代国語用例辞典』略語『15万』
- 『日本語を学ぶ人の辞典』略号『日』
- 『日本語「らしさ」の言語学』略号『日本』